

## [体育・保健体育]

## 子どもの身体とかかわりに着目した体育実践

- 動きの観察とニュースポーツの実践から -

秋山 晃\*

## 1 研究の動機

「心と体の一体化」という新しい理念で、「体ほぐし運動」が導入された背景には、体を動かすことをおっくうがったり、日常生活での身のこなし方がぎこちなかったり、運動の中で仲間とうまくかかわれないなどの子どもたちの実態がある。さらにまた、よく運動する子どもとそうでない子どもの二極化傾向が進んでいるという実態もある。そして、集団遊びでの人と人とかかわり合いの不足が子どもたちの「心」と「体」をアンバランスな状態にしている。学習指導要領では、この体ほぐし運動について「自分の体に気づき、体の調子を整えたり、仲間と交流したりすること」とねらいを挙げ、「いろいろな手軽な運動や律動的な運動を行い、体を動かす楽しさや心地よさを味わうことによって、自分や仲間の体の状態に気づき、体の調子を整えたり、仲間と交流したりする運動である」と定義している。これは、体への気づき、体の調子を整える、仲間と交流することを運動を行う中で意識化できるようにすることとも解釈できる。そして、生涯の中で動きの発生と広がりをもっとも顕著な小学校の時期に、「動けない」子どもたちを、「動ける」子どもたちにしたいと期待をしていると考えられる。

私がこれまで実践してきた体育授業を振り返ってみると、教師も子どもも強く意識し着目してきた事柄に、「記録の伸び」や「技の達成」がある。そして、さらに記録を伸ばすためとかより難しいわざができるようにどんな動き（動作）が大切か、を問題にしてきた。つまり子どもたちの身体経験の過程ではなく、子どもたちに自発的な学習活動の方法（スパイラルやステージ型の学習過程）を理解させ、後は学習の結果としての「記録の伸び」や「技の達成」だけを求めていたように思う。さらに、私も子どもも、「記録の伸び」や「技の達成」を通して比較する（される）という意識からなかなか抜け出せないようなところもある。

体育科も時代の教育課題と連動し、授業における学びをどのように構築していけばよいか、その対応が問われている。私は、これまでの教師の指導や子どもの学習と子どもに現れた成果との因果関係だけを問題にするのではなく、授業の過程に含まれる「子どもの内的経験」を重視していくことが必要なのではないかと考える。つまり他者やモノとの共感に拠る意味に目を向けた体育授業の在り方に目を向け、子どもたちが豊かに仲間やモノとかかわり、学ぶ楽しさを味わえるような体育授業の在り方を検討していく必要があると考えた。

以上のような理由から、授業中の子どもたちはどのようにして運動に親しむ身体になっていくのかを運動とのかかわりや学びの様子などから検証していくことにした。

## 2 主題設定の理由

## (1) 子どもの身体と運動習得過程から

私が体育の授業でどのように子どもたちの動きを見てきたかという、実感的で主観的に把握されるような、つまり、内から感じる身体の捉えではなく、どちらかという物体のように外から見られて数量化され客観化される身体の捉えの方に重点を置いていたように思う。子どもたちの身体を型にはめるような見方ではなく、子どもの身体のもつ無限の可能性を引き出すような見方をしていかなければいけないと考える。

また、学習内容には運動の楽しさや学び方を中核としながらも運動技術の指導が中心であった。運動技術は誰にも適用する動きの〈こつ〉を抽出したものだが、全ての人に当てはまるとはいえない。運動技術の指導はとても大切なことだが、子どもを指導しているとき、技術指導をすればみんな運動を習得できるとか、あまりにもやさしい動きができない子どもに「やる気がない」とか「運動神経が鈍い」という評価をしてしまうことがある。これは運動指導で

\* 妙高市立妙高高原南小学校

一番大切な子どもと教師のかかわりが失われてしまうことになる。佐藤徹は運動がうまくいかない子どもに対する技術指導のポイントとして、「いま行っている運動の一つ前の段階」を調べたり、関連のある運動〈アナログン〉を準備したりすることを挙げている。これは、子どもたちの動きをよく見たり、われわれ教師も、その過程にかかわったりすることで、子どもたち一人一人に合った運動技術の指導が可能になることを示している。

さらに、子どもたちは、無意識のうちに、教師の説明を聞くまでもなく、自然な形で見よう見まねで運動に取り組み、それを習得していることがある。それは、運動には言語的な知識以上に「身体知」が必要だということを示している。瀧澤は、身体運動を習得するということは、「ある状況の中で『今・私は動ける』という【身体】を【下位動作】を手がかりに、再構造化することと述べ、身体運動を可能にする身体的思考について「身体的対話」「身体的判断」「身体的記憶」に分けて論じている。身体的対話とは、「身体として相手にはたらきかけ、相手（たとえば物）の論理を知覚の差異として受け入れること」であり、言葉なしに「下位動作」のレベルで行われるものである。次に、身体的判断とは、「みずからが保持している身体の構造から、『私が、今、ここで、何を』するのかを判断すること」である。そして、身体的記憶とは、「実行を可能にする有効な判断のために必要な記憶」である。

子どもたちの運動習得過程で、繰り返し活動の後に飛躍的な進歩が見られるのも子どもたちの体の中で前述のような様々なことが起こっていると考えられる。よって、子どもたちが繰り返し運動に挑戦するような学習過程を構成する必要があると考える。

### (2) 運動の特性から

運動の特性にふれることに伴う楽しさや喜びを経験させるために、学習者自らの力に応じて設定したねらいによって学習過程を構成する「楽しい体育」は、形式的な展開から個々の子どもたちの具体的な欲求と期待から遊離する事態が起きたり、自由な課題選択が行えず、いつまでも低いレベルの課題に取り組み、まるで運動に楽しめない子どもが見られたりするという課題を抱えている。つまり、運動とのかかわりかたを規定してしまうような傾向をもっている。そこで、子どもの織り成す運動を丸ごと捉えるようなかかわりの体育に関心が向けられている。私は体育学習で、子どもたちが様々なかかわりを通して運動を身体でわかっていく学びを見ていこうと考えた。

そこで、子どもたちがどのように運動に親しむ身体になっていくのかを見ていくために、個人的スポーツと集団的スポーツの両方から検証していくこととした。そして、授業の中で子どもたちが十分に対象となるモノとかわるような個人的スポーツとして、できるできないがはっきりと現れるような運動領域の中から跳び箱運動とハードル走を選んだ。

跳び箱運動は、自己の能力に応じて運動の技能を身に付け、さらにそれを高め、技が円滑にできるようにする運動である。また、陸上競技のハードル走も自己の能力に適した課題をもって運動技能を身に付け、競走したり、記録を高めたりする運動であるからである。

集団的スポーツは、子どもたちの経験のないニュースポーツを選んだ。それは、子どもたちが共通の土俵で新しい運動と出会ったとき、どのようにして運動に親しむ身体になっていくのかを様々なかかわりや学びを通して見取ることができるのではないかと考えたからである。

### (3) 子どもの実態から

体を動かすことが大好きで運動に意欲的に取り組む子が多い学級である。特に走ったり、投げたりする運動を好み、持久走やボール運動への取組みが積極的である。反面、マット運動や跳び箱運動などボール以外のモノとかわるような運動を苦手とする子もいる。地域の特色としてスキーが盛んなため、育成会等に所属し、年間を通してスキー練習や他のスポーツに親しんでいる子もいる。

このような実態から、集団的スポーツとして、子どもたちが経験のない新しい運動に出会ったとき、どのようにその運動とかわかって運動に親しむ身体になっていくのかを見ていくためにニュースポーツを取り上げることにした。

## 3 研究の目的

以上のような方向性をふまえ、本研究では、子どもたちがどのように運動に親しむ身体になっていくのかを体育学習に現れる子どもの動きの中に求めていく。そして、その発生と行為においてどのようなかかわりや学びがあるかに着目し、そこから子どもたちが身体でわかっていく体育授業にはどんな条件があるのかを検証することを目的とする。

## 4 研究の内容と方法

本研究は、中・高学年を対象とした個人的スポーツ（跳び箱運動とハードル走）の授業観察の分析と高学年の集団的スポーツ（ドッジビー・ユニバーサルホッケー）の授業実践とその分析を研究対象とし、以下の方法で実践を行い、研究目的の達成を図る。

### (1) 子どもたちが十分に運動に親しめるような授業の観察と実践

子どもたち一人ひとりが自主的・自発的に運動対象となるもの(ハードル、跳び箱)とかかわれるような単元計画を作成し、授業観察を実施する。また、ニュースポーツは、全員が初めて経験するという子どもの実態から、子どもたちの志向性に合わせた単元計画を作成し実践する。

### (2) 子どもたちの動きや学びの抽出と分析

子どもたちの動きの変化や学びの様相を抽出し、それらの動きや学びが子どもの身体が運動に親しむようになっていくこととどのようにかかわっているかを分析する。そして、その分析から子どもたちが運動を身体でわかっていく条件を明らかにしていく。

授業観察では、動きの変化や学びの様相が現れやすいと考えられる運動の習得過程(できない子ができるように挑戦する場や動きが明らかに変わってきた場面)に注目し分析をする。そして授業実践では、子どもたちがニュースポーツに取り組む様子を観察し、運動を身体でわかっていく場面を抽出し分析をする。

### (3) 子どもたちの身体が運動に親しむようになっていく過程を大切にしたい体育授業

個人的スポーツ(跳び箱運動、ハードル走)の授業観察と集団的スポーツの授業実践(ドッジビー、ユニバーサルホッケー)から、子どもたちの身体性に着目した体育授業に必要な条件を明らかにしていく。

## 5 研究の実際

### (1) 個人的スポーツ(跳び箱運動、ハードル走)の授業観察と分析・考察

#### ① 跳び箱運動の授業観察から [4年生 H子 跳び箱運動「開脚跳び」(4/4)]

##### ア 観察の記述

授業のねらいは、「自分の今できる力でいろいろな高さの跳び箱に挑戦してみよう」であった。子どもたちが自分の好きな場で自由に挑戦していた。抽出した児童は縦に置かれた5段の跳び箱に挑戦をしていた開脚跳びが上手くできない5人の子どもたちの中の一人である。その中でH子を抽出したのは、H子が一回跳ぶごとに首を傾けたり、上手に跳んでいる友達をよく観察したりして、何とか跳びたいという思いが伝わってきたからである。

##### イ 抽出場面の分析と考察

H子は5段と6段の跳び箱を合わせて29回跳んだ。10回目の挑戦では、これまで跳び箱の中央で開脚座になることを繰り返していたが、跳び箱中央より少し先の方で開脚座になった。友達に「横はできたよね」と話かけていることから以前、横で跳べたときの感じに近づいているようであった。その後の跳び方を見ても、「手で跳び箱を突き放す」といった動きが見られるようになった。H子の中で目的(こうしたい)と手段(そのために何をやる)の連鎖が確立し、そのつながりを身体感覚として感じることからくの変化であるように思えた。

14回目の挑戦では、今まで3歩助走しかしなかったH子が初めて5歩助走をした。「手で跳び箱を突き放す」といった動きもはっきりと見られるようになった。そして、跳び箱の端でお尻を打ちながらも初めて跳び箱を跳び越えた。お尻を打ったときは、見ても痛そうであった。しかし、「痛い」と大きな声で叫ぶが、表情は笑顔であった。初めて跳べてうれしくて仕方がないといったように見えた。そして、手を突き放してから開脚して足を引き寄せるタイミングがあっているように見えた。「踏み切り」「身体を前へ投げ出す」「手で突き放す」「足を引き寄せる」という動きがうまく繋がったように見えた。さらに、教師が「お尻がポーンと跳び箱にぶつかって、その次、跳べたじゃない。それ何が違ったかわかる」という質問に対してH子は「助走にスピードがあった」と答えていた。

15回目の挑戦では、お尻を打たずに跳び箱を跳び越した。跳び終えたH子は、着地後すぐに跳びはねて満面の笑顔を見せた。H子の天にも昇る心地といった心境が窺えた。H子の身体は何か今までと違った知の習得があったと考えられる。それは、①助走、②踏み切り、③第一空中局面、④着手、⑤第二空中局面、⑥着地といった局面の動きが全体として密接にからみ合い、うまく組み合わせられたことにより、一連の動きの協応を実感できたことにより立ち上がった知であると言える。

27回目の挑戦では、H子の跳び方が今までにない雄大な跳び方で、観察していた筆者は勿論だが、見ていた何人もの友達が「何か今すぐかった」と感嘆の声を上げていた。26回目の挑戦では、助走なしで跳ぼうとしたが跳べなかった。そのことがH子の身体に「力強い踏み切り」「着手時間の短縮」と「突き放し」を組み立たせ、雄大な跳躍に繋がったのではないかと推測できる。H子はこれまで経験した気づきを総動員して、さらに、助走の仕方を変えたりするなどの試行錯誤を通して、これまでの動きを組み立てなおし、より大きな躍動感のある新しい動きを現出させたと考える。

## ② ハードル走の授業観察から [5年生 T子 陸上箱運動「ハードル走」(4/4)]

### ア 観察の記述

単元目標は、「ハードル間を3歩のリズムで調子よく走り通すことができる」であった。本時までの学習活動は、1時間目に「自分の踏み切りやすい足を知る」「同じ踏み切り足で輪を跳ぶ」といった課題で輪跳びハードルを行った。2時間目は、第1ハードルを越える練習や倒した3台のハードルを調子よく越える活動をした。3時間目は、教師から「振り上げ足の足の裏を前にいる人に見せよう」と課題を与えられ活動した。そして、本時は学習のまとめとして、ハードル間のインターバルが違う3つの場(5m, 5.5m, 6m)で「ハードル3台を3歩のリズムで跳び越す」という課題であった。子どもたちは自分の好きな場で、自由に挑戦していた。

### イ 抽出場面の分析と考察

6回目の挑戦ではハードル間5mの場へ移動する。T子の何とかハードル間を3歩で走ろうとしているこれまでの姿から、越え方や速く走るとのことより、とにかく「ハードル間を3歩で走り通す」ということだけが、T子にとっての課題であったと考えられる。第2ハードルで身体が上がりすぎてしまったT子だが、抜き足の膝を胸に引きつけ、前に出そうとした。そして、何とか3歩で走りたいという気持ちからか、自然に右手が前に出て、上体を少し前に倒す。この動きは今まで見られなかった動きであり、この後7回目以降も「右手を前に出す」「上体を前に倒す」という動きが見られるようになる。3歩で第3ハードルを越えた後のT子のうれしそうな表情がこれまでにない際立っていた。

13回目の挑戦では、第2ハードルで上体がねじれていたが、すぐに立て直す動きが見られた。これまでは、身体がねじれるとすぐにバランスを崩してしまっていたが、今回はしっかり立て直していた。それは、T子の身体が、空中動作を局面としてだけで捉えず、「踏み切り—空中動作—着地」といった流れの中で捉えることができていたため、バランスの崩れは微調整ですむことになったと考えられる。ここでのT子の身体は、易しい場を繰り返し経験したことにより、「踏み切り」「空中動作」(ハードリング)「インターバル走」の個々の動きの協応を実感することができるようになったのではないかと推測できる。それは、この後、だんだんスムーズな走りになっていったことから、動きの繋がりを動き全体の中で捉えられるようになったと解釈できる。

T子の18回目が、リズムにのったスムーズな走り方で、筆者が思わず感嘆の声をあげてしまった。筆者が、「どんな感じだった」と聞くと「うーん、ハードルがうまくぬけてスピードが落ちなかった」と答えている。「ハードルがうまくぬけた」とか「スピードが落ちなかった」答えていることから、自分の動きがどうであったかを自分でわかっている、と推測できる。つまり、自分の動きを自己観察できていた状態であったと言える。

18回目に自分でも(今の何となくよかった)と感じたT子は、教師に授業の終わりを告げられ、がっかりした表情を見せる。しかし、K子から勧められ挑戦する。振り上げ足が真っ直ぐに前に出て、上体が揺れることなく安定したフォームで第1ハードルを越える。そして、第2、第3ハードルとだんだん加速をしていった。さらに、第2ハードルからハードルを越えるときに上体が自然に前傾していった。また、抜き足もハードルを越えた後、ぐーと前に引っ張られるように出ていった。明らかに今までと違う、リズムのいいスムーズな走りであった。そして、走り終えた後、すぐに後ろを振り向き、笑顔を見せていた。

### ③ 考察

跳び箱運動とハードル走の授業観察から、運動が上手くできない子どもたちができるようになるまでの運動習得過程を次の4つの位相にまとめた。

#### 「目的—手段連鎖の実感」

子どもが運動するとき、「こんな動きにしたい」という結果あるいは目標態としての動きを描く。授業では通常それが「めあて」として設定され、その動きができるようになることを求めて活動が展開される。その過程で、目的としての動きを実現させるためには、その手段としてどのような動きが有効なのか、をわかるようになる。この場合のわかるとは、教師から説明されたり学習資料を見たりして頭で理解することとは違い、身体で目的—手段の繋がりを実感する事態を指している。つまり、目的と手段の連鎖が身体的に納得できたような状態である。

#### 「動きの協応の実感」

子どもの身体は、自在に自分の運動感覚や運動図式を組み替えている。そして、深層、表層の意識が現れたり消えたりして、それに伴って動きも変化していく。その過程で、動きの繰り返しが経験として徐々に身体に沈殿していき、全体の動きが繋がった感じを掴むような状態になる。つまり、子どもたちが、「今、うまくいった」と言っているような時である。今の「どうしてできたの」とか、「どんな感じがした」と子どもたちに聞いても、一生懸命に言葉を探すが思い浮かばない。言葉にできないが、確かに身体が何かを掴んだと実感している状態だと考えられる。

### 「動き只中の自己観察」

子どもの動きを見ると、主体としての身体が、いま運動している自分の身体を客体として自己観察し、その出来ばえを瞬時に確かめているような様子が見られる。「ねえ、ねえ、今のどうだった」ではなく、「今の自分の動きはよかったでしょ」とか、「すーと身体が前に出たよ」といった子どもたちの言葉からも、自分の動きを自己で評価していることが窺える。

### 「動きの再構成」

今までの動きを手がかりに、自分の身体を意識通りに動かすことができるようになる。そして、無駄や無理のない動きになっていくような状態である。つまり、動きや運動の対象となるモノとのかかわりの中で、感じたり気づいたりしたことを自分の身体に組み込み、新しい動きを再編成する状態である。

## (2) 集団的スポーツの授業実践（ドッジビー、ユニバーサルホッケー）の分析・考察

### ① ドッジビーの実践

6年生（男子5名、女子8名）を対象としてドッジビーの実践をした。経験のある子は一人もいない。子どもたちは新しい運動とどのようにかかわっていくのか、その様子や動きを観察した。

#### ア 1時間目

フリスビーを手にした子どもたちは、何回か投げた後、友達とキャッチボールのようにしたり、どちらが遠くまで投げられるか、競争をしたりしていた。新しいモノとのかかわりから、他者とモノとのかかわりへとかかわりが広がっていく様子が見られた。運動が得意な子は、いろいろな投げ方を試したり、友達ととにかく競争をしたりする様子が見られた。

その後、子どもたちと話し合いルールを決め、ドッジビーをした。ルールは、ドッジボールルールでボールの代わりにフリスビーを使うというものだった。子どもたちはしばらくゲームをした後、フリスビーを二つにした。チームで声を出し合う場面が多くなった。いつもはボールを持つと友達にボールを渡さないような運動が得意な子が、あまり運動が得意でない子にフリスビーを渡す場面が多く見られた。

授業後の感想では、運動が得意な子は、「投げにくかったけど楽しかった」「思い通りにならなかったところが楽しかった」「いろいろな投げ方をすると変なところに行ってそれが楽しかった」といった感想を書いていた。また、運動があまり得意でない子は「当たっても痛くなく楽しかった」「もっとやりたかった」といった感想を書いていた。「野球のようにやりたい」「バスケットのようにしてやりたい」といった感想もあり、次時にやってみることにした。

#### イ 2時間目

ゴールを用意し、赤白に分かれて競争をした。旗に当たったら30点、上に入ったら20点、下に入ったら10点というルールを子どもたちが決めた。なかなか点数が入らなかった。

その後、バスケットボールのルールでゲームを始める。フリスビーを持って歩くのはなしで、パスをつないでゴールにフリスビーを入れるというルールである。子どもたちの感想では、「すごく楽しかった」「なかなか点数が入らないところが楽しい」「フリスビーが思い通りに投げられるようになってきた」といったものが出てきた。全員が「楽しかった」と書いていた。

#### ウ 3時間目

ベースボール型でピッチャーなし、打つ代わりにフリスビーを投げるというルールであった。運動が得意な子は、身体をねじったり、手首のスナップを使ったりして投げ方が上手になってきた。苦手な子は身体のねじりがなく、手首だけで投げるのであまり遠くへ飛ばない様子が見られた。あまり遠くへ飛ばしたいという気持ちもないようであった。子どもたちの感想は、「バットを使うより楽しい」「体を横向きにしたら遠くへ跳ぶようになった」といった感想がでてきた。

### ② ユニバーサルホッケーの実践

6年生（男子5名、女子8名）を対象としてユニバーサルホッケーの実践をした。ドッジビーと同様で経験のある子は一人もいない。子どもたちが新しい運動とどのようにかかわっていくのか、その様子や動きを観察した。

#### ア 1時間目

スティックとボールを提示したところ、お互いにボールを打ち合ったり、サッカーのミニゴールを出してきてシュートをしたりする子もいた。しばらく用具とかがわった後、「ゲームをやろう」という意見が出てきたのでルールを相談させた。そして、全員で2チームに分かれてゲームをすることになった。サッカーやミニバスのゲームではあまり動かない子もボールを追いかけて汗だくになっていた。子どもたちの感想は、「ボールがいろいろなところに行って楽しかった」「スティックを扱うのが難しいけど、今までにない感じでおもしろかった」といった感想が出てきた。

## イ 2時間目

前時の反省から、「人数を少なくした方がいい」「リーグ戦をしたい」という意見が出てきた。そこで1チーム3人でリーグ戦をすることになった。前時と違いリーグ戦になると運動の得意な子が積極的に動き、自分で強引にシュートをする様子が見られた。また、運動が得意な子が中心になって作戦を立てるグループもでてきた。子どもたちの感想は、「3対3にして疲れたけど楽しかった」「人数が少ないからシュートがしやすかった」といった感想が出た。

### ③ 考察

二つの授業実践を通して、子どもたちの身体が運動に親しむようになっていく過程を次の3つに区別した。

#### 「ものとのかかわり」

最初に小さい子どもの遊びの世界で見られる繰り返しが見られた。これは滝澤の言う身体的思考の「身体的対話」がステップを踏んで道具を身体化しようとしている段階であると言える。子どもたちには何も制限がないので動きがだんだんダイナミックになっていく様子が窺えた。また、運動が得意な子とあまり得意でない子では、新しい用具とのかかわり方が違う様子が見られた。それは、フリスビーを例にすれば、運動が得意な子は、とにかくいろいろな投げ方を試していた。そして、上手くいくとその投げ方で何回も繰り返し投げ合う様子が見られた。これは運動が得意な子が「身体的な記憶」が豊富で、多様なものへの働きかけができる身体を持っているからだとも言える。

#### 「人とのかかわり」

ものと十分にかかわった子どもたちがお互いにフリスビーを投げ合ったりするなど、ひととのかかわりが見られる段階である。発話が多くなり、既存のルールにとらわれることなく、ものを通してひととかわることを楽しんでいく様子が見えた。また、かわる人数も一人から二人へとだんだん増えていった。ここでは運動が得意、苦手にかかわらず、積極性のある子どもが友達に声をかけてかわろうとしていた。そして、他の子どもたちがそれを見て真似るようにしてひととのかかわりが広がっていった。友達の投げ方やスティックの使い方を見てヒントを得たのか、ものとのかかわりが豊かになり、身体が構造化が進む様子が窺えた。

#### 「こととのかかわり」

ものやひとに慣れた子どもたちは、今までの経験を基にゲームをやろうと話し合いを始めた。約束ごと（ルール）といったこととかわろうとする段階である。ここでの子どもたちは、今できるものやひととのかかわりと自分ができるような運動（動き）ができるかを了解しており、それを基に約束ごと（ルール）を自分たちで決定していた。子どもたちのゲーム中の表情や授業後の感想から、そのことが子どもたちに動くことの楽しさを生み出させていると感じた。ここでは「勝ちたい」という気持ちが強いのか、今までに見られなかったものやひととのかかわりが見られた。運動が得意な子は、困難な状況を解決する【下位動作】が豊富で、こととも上手くかわることができていた。

## 6 まとめ

### (1) 研究の成果

昔から職人の世界で言われてきた「習うより慣れよ」という格言がある。この格言のように、子どもたちの運動習得には、ものやひと、ことと十分にかかわる時間が必要ではないかと考える。それは、子どもたちが自然な形で運動に親しんでいるように見えても、その裏側では子どもたちの身体が意識下レベルの中で、さまざまな身体的思考をはたかせて運動を習得しようとしているからである。つまり、運動を習得するには、子どもたちが自ら解決しなければいけない多くの課題があるということである。そして、その課題は一人一人異なっている。だから、われわれは、子どもたちのかかわりの経験の中味に目を向け、そこで子どもたちの身体に何が起きているかを見取り、それを生かしていくような学びを構築していくことが大切である。

### (2) 今後の課題

子どもの動きの観察と考察について、運動する身体のあり様をしっかりと捉えていく必要がある。そして、運動の経験差のある単元をどのように計画し実践していくか、検討していく必要がある。

## 引用・参考文献

- 小林寛通（2000）『新学習指導要領による小学校体育の授業 考え方・進めかた』 大修館書店  
 滝澤文雄（1995）『身体の論理』 不味堂  
 文部省（1999）『小学校学習指導要領解説 体育編』 東山書房  
 佐藤 徹（2001）『教師のための運動学』 大修館書店